

IV-6 中国・四国

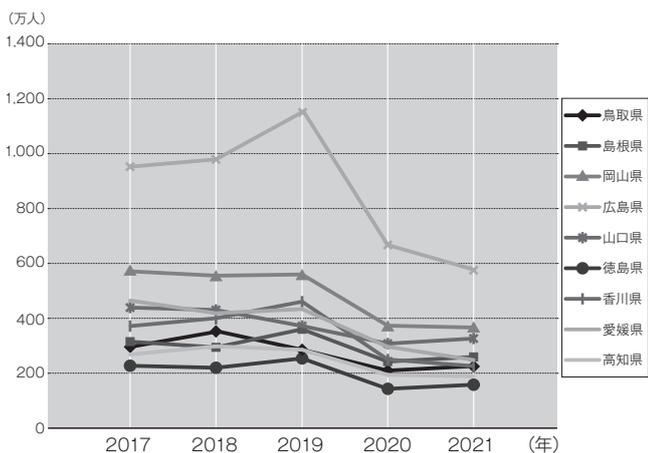
宿泊者数は中国・四国全体で前年比3.9%減
アフターコロナを見据えた中長期視点の
新たな取り組みが各地で実践された

(1) 都道府県レベルの旅行者動向

観光庁「宿泊旅行統計調査」によると、2021年1月～12月の中国・四国全体の延べ宿泊者数は2,607万人泊となり、2020年比で3.9%減、2019年比で38.1%減であった。

延べ宿泊者数が前年から増加したのは、徳島県(前年比10.4%増)、鳥取県(同7.8%増)、島根県(同7.0%増)、山口県(同6.1%増)、減少したのは岡山県(同1.8%減)、高知県(同2.7%減)、香川県(同10.2%減)、広島県(同13.4%減)、愛媛県(同15.4%減)であった(図IV-6-1)。

図IV-6-1 延べ宿泊者数の推移(中国・四国)



(単位：万人泊)

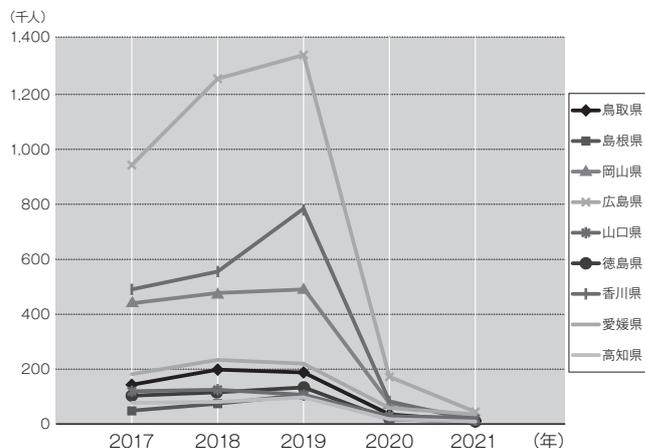
都道府県名	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
鳥取県	299	356	289	212	229
島根県	319	298	364	245	262
岡山県	583	561	566	377	371
広島県	963	990	1,163	675	584
山口県	444	435	376	311	330
徳島県	230	222	257	145	160
香川県	376	405	466	253	227
愛媛県	470	425	439	300	254
高知県	271	301	290	196	191

資料：観光庁「宿泊旅行統計調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

2021年1月～12月の中国・四国全体の外国人延べ宿泊者数は17万人泊となり、前年比で65.0%の減少であった。

外国人延べ宿泊者数は全県で減少し、香川県(前年比83.4%減)、広島県(同74.3%減)、岡山県(同70.5%減)、鳥取県(同67.9%減)、徳島県(同51.9%減)、高知県(同48.5%減)、愛媛県(同38.9%減)、山口県(同37.9%減)、島根県(同15.3%減)であった(図IV-6-2)。

図IV-6-2 外国人延べ宿泊者数の推移(中国・四国)



(単位：千人泊)

都道府県名	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
鳥取県	141	195	185	34	11
島根県	48	73	104	13	11
岡山県	439	469	487	74	22
広島県	928	1,237	1,322	169	43
山口県	117	123	104	32	20
徳島県	103	116	134	20	10
香川県	482	546	772	81	14
愛媛県	179	230	216	58	35
高知県	75	79	95	17	9

資料：観光庁「宿泊旅行統計調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

(2) 観光地の主な動向

① 地方・都道府県レベル

● 行政・民間が参加する「瀬戸内島旅活性化研究会」が発足

瀬戸内海の観光振興の方策を探る「瀬戸内島旅活性化研究会」が2021年4月に設置され、同年6月に初会合を開いた。同研究会は、本州四国連絡高速道路株式会社(兵庫県神戸市)が香川大学と共同で設置を呼び掛け、有識者や島民、民間事業者、DMO・観光協会、行政機関(国・自治体)など36団体が参加し発足した。

同研究会は、地域の人々が活躍できる観光の場の創造をテーマとして、人々が生き生きと幸せに暮らすことができる島を実現することをゴールとしており、直島諸島と比べ観光来訪者が少ないとされている塩飽諸島を主な検討ターゲットとし、備讃瀬戸全体の島旅の魅力度向上への貢献に取り組んでいる。具体的には「島民の方々との連携による自然環境、歴史、食文化などの地域資源を生かした魅力度の高い体験コンテンツの企画」「これらを組み込んだストーリー性の高い島旅周遊ツアーの企画」「効果的な塩飽諸島の観光資源関連情報の発信」などの提案を行い、これらについて、研究会構成員による一体的な議論を通じた有効かつ実効性の高いアウトプットを打ち出していく方針だという。

●各県によるワーケーション誘致に向けた取り組み

鳥取県は、副業やワーケーションなど多様な関わりでの関係人口拡大を目的に「ふるさと来LOVE(クラブ)とっとり」プロジェクトを推進し、2021年11月には家族が子どもと一緒に参加するファミリーワーケーション実証実験などを実施した。こうした取り組みを背景に、2022年4月には鳥取県や鳥取市、鳥取商工会議所、DMO、民間事業者でつくる「とっとりワーケーションネットワーク協議会」が設立された。

岡山県は、2021年7月に県内市町村や民間事業者と連携して、移住定住促進を念頭に、ワーケーション誘致を進めるための検討会を立ち上げた。検討会は県の呼び掛けに応じた22市町村と観光や交通、宿泊事業者など民間約30団体が参加し、大都市圏の企業担当者を招いた1週間程度のモニターツアーや、鳥取県と連携した大山隠岐国立公園での共同ツアー(2泊3日)などを実施した。検討会の成果は誘致に向けた各市町村の施策や旅行会社のツアー商品づくりに生かす予定である。

徳島県は、企業のサテライトオフィスを受け入れてきた環境や経験を生かし、徳島ならではのワーケーション「アワーケーション」を推進している。2021年度は地元団体や航空会社と一緒にモデルとなる10プログラムを用意し、藍染や和傘作りといった伝統産業を体験したり、サテライトオフィスと連携して働き方の見直しについて学んだりといった多彩なメニューを打ち出した。同県ではワーケーション誘致による経済効果だけでなく、地域に継続的に関わる「関係人口」の増加を目指す。

●世界初、徳島県と高知県を結ぶデュアル・モード・ビークル(DMV)の営業運行開始

徳島県海陽町の第三セクター阿佐海岸鉄道が、道路と線路の両方を走れる改造車両「デュアル・モード・ビークル(DMV)」の営業運行を2021年12月に開始した。DMVは当初2020年度内に運行を始める計画だったが、国土交通省が学識経験者などで構成する技術評価検討会において安全対策や試験項目の追加が求められ、車両の改修や再評価に伴い運行は延期されていた。

DMVは線路と道路の両方を走る定員21人のマイクロバスの改造車両で、鉄道と道路両用のDMVの本格運行は海外でも例がなく、世界初の事例となった。運行区間は、徳島県海陽町と高知県室戸市を結ぶ約50kmで、阿波海南文化村-阿波海南駅と、甲浦駅-海の駅東洋町-道の駅穴喰温泉をバスモード、阿佐東線の運行約10km区間を鉄道モードで走る。平日便と土日祝日便で停車駅や停留所が一部異なる。

同社と関係自治体からなるDMV導入協議会は、1年間で約75,000人が乗車し、経済波及効果を約2億1,400万円と見込んでいる。徳島・高知両県や沿線自治体は連携して、記念切符や切手の販売、グッズ製作などを展開し、地域の活性化を図る。

●農林水産省が中国・四国地方51か所の棚田を「棚田遺産」に選定

農林水産省は2022年2月に、全国271か所の棚田を「つなぐ棚田遺産」として選定したと発表し、中国・四国地方各県の棚

田51か所が選ばれた。県別の選定件数は鳥取県3件、鳥根県11件、岡山県7件、広島県4件、山口県8件、徳島県5件、香川県4件、愛媛県5件、高知県4件であった。

つなぐ棚田遺産は外部有識者から構成される選定委員会で、「積極的な保全の取り組みがなされ、今後も継続される見込みがある」「棚田を含む地域の振興に多様な主体や多世代が参加している」といった要件を満たしているかが評価され、全国の自治体が推薦した274か所から選ばれた。

農林水産省は1999年に棚田の保全活動を推進しようと全国の134地区を「日本の棚田百選」として認定し、その後20年以上がたつなか、棚田を核とした地域の活性化、水を蓄える国土保全機能や景観美といった多面的機能への理解を深めようと、改めて優良な棚田を認定する取り組み「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～(ポスト棚田百選)」として実施した。2022年2月～4月には、つなぐ棚田遺産の選定を記念して、首都圏のアンテナショップを核とした選定記念プロモーションが実施され、つなぐ棚田遺産に選定された棚田を紹介する展示や、棚田地域に関連した商品が販売された。

●鳥取県と鳥取市の連携協約による鳥取砂丘の保全と活用の推進

2021年12月、鳥取県と鳥取市は、鳥取砂丘の保全と活用に連携して取り組むため、地方自治法に基づく連携協約を結んだ。同協約では、県と市が一体となって事業を展開するための基本方針や、協力する分野を明記した。協力するのは、「観光振興の推進」「保全と利活用」「砂丘西側エリアでの滞在環境の上質化」「交通環境の整備」「情報共有」の5分野で、県と市が定期的に協議し、役割分担しながら連携を図る。

砂丘西側エリアでは、キャンプやグランピングを中心とした滞在型観光施設の整備を進める。市が所有するサイクリングターミナル、柳茶屋キャンプ場、県が所有するチュウブ鳥取砂丘こどもの国キャンプ場の3施設を一体的に活用し、砂丘一帯の魅力向上を目指す。

●鳥根県観光連盟、松江・出雲・安来の3市を「&ご縁の聖地」としてブランド化

鳥根県観光連盟は2022年2月に、出雲路エリア(松江市・出雲市・安来市)の新しい観光ブランド「&ご縁の聖地」を立ち上げた。「『&ご縁』とは毎日がより良くなる、つながり。」をコンセプトとして打ち出し、恋愛や結婚にとどまらず、過去や現在を含め人生における人とのつながりに感謝する旅を提案する。

このブランディング事業の第一弾として、特設サイトを開設し、プロモーション動画を公開したほか、TwitterとInstagramで、幅広くご縁にまつわるエピソードを投稿してもらう「#わたしの縁(エン)ピソード」キャンペーンを実施した。

②広域・市町村レベル

●鳥根県海士町、顔認証システムを活用したキャッシュレス決済の実証実験

2022年2月～3月、鳥根県海士町で顔認証システムを活用したキャッシュレス決済の実証実験が行われた。町内の宿泊施

設や土産物店など5か所を結び、利用者が「顔パス」でチェックインや買い物ができる仕組みを構築し、観光客からの利便性向上につながる効果や導入に向けた課題の検証を行った。

顔認証決済は、まず町の玄関口の菱浦港に到着した来島者が町観光協会にあるタブレット端末で事前に顔の画像やメールアドレスを登録し、クレジットカード番号の入力手続きを行う。ホテルの受付や土産物店のレジそばにあるタブレット端末に顔をかざすと、事前登録された情報と照合され、数秒でチェックインや買い物の手続きができる。実際の支払いは、利用者が購入履歴の通知をメールで受け取り、専用サイトから行う。

●備後圏域の地元産品を使った「びんごい一つ」を発売開始

広島・岡山県境の8市町の自治体や経済団体でつくる「びんご圏域活性化戦略会議」は、2021年10月、地元の産品と組み合わせたコッペパンとソフトクリームの「びんごい一つ」を販売開始した。

びんごい一つは、圏域内の旅館やスイーツ店40店の計54品が認定され、コッペパンは神石牛のローストビーフや福山市のガス天、タチウオのフライなどを挟んだ31品、ソフトクリームは同市沼隈町産のシャインマスカットや尾道市の因島産のはっさくなどをトッピングした23品がある。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響でテイクアウト需要が高まったことを受け、同会議が圏域ならではのテイクアウト商品の開発を検討して実現したもの。圏域の産品は少量多品目のため、さまざまな食材をアレンジできるコッペパンとソフトクリームで商品開発が行われた。

びんごい一つの統一ロゴとコッペパン、ソフトクリームの各ロゴが旅行会社の提案を受けて会議で作成され、ロゴを使ったポスター作成や、観光を組み合わせた周遊ルートづくりなどが進んだ。

●岡山市、「桃太郎電鉄」と連携し謎解きゲームに挑戦する観光キャンペーンを開催

岡山市は、2021年11月から2022年3月まで、観光PRの一環として市内にある日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」ゆかりの地を巡って謎解きゲームに挑戦するキャンペーンを実施した。同市では2020年から桃鉄と連携したプロモーション事業を展開している。

桃太郎伝説の構成文化財となっている吉備津彦神社、吉備津神社、造山古墳の3か所を舞台に、クイズラリー形式で実施した。参加者が各スポットを巡りながら、桃鉄のキャラクターが出題するクイズやパズルに挑戦するというもの。参加費は無料で、難易度にに応じて2～3時間でクリアできるコースと、半日程度かかるコースを設定した。参加方法は、JR岡山駅構内の市ももたろう観光センターや、各スポットで配布されている専用の冊子入手し、冊子に掲載されているQRコードをアプリ「LINE」で読み取る。クリアした人には、賞品として桃鉄オリジナルステッカーを用意した。

プロモーションでは、岡山の桃太郎伝説に登場する温羅^{うら}が岡山市と桃太郎電鉄のオリジナルキャラクターとして登場し、温羅の声には岡山県出身の声優を起用した。

●高知県土佐清水市、土佐清水ジオパーク認定

2021年9月、貴重な地形や地質が残る自然公園「日本ジオパーク」に高知県土佐清水市の土佐清水ジオパークが認定された。土佐清水は日本で44地域目のジオパークとなる。国立公園と連携した拠点施設の整備・運営やジオガイドによる質の高いジオツアーの展開、教育現場との学習プログラムづくりや地域防災への優れた取り組みが進められている点が評価された。

土佐清水ジオパークは四国西南の端に位置し、日本列島が大陸から分離した激動の時代を記録した竜串海岸やマグマ活動が作り出した足摺岬など、大地の変動を記録したダイナミックな地質・地形が特徴である。日本列島の成り立ちを理解するうえで重要な地質体が存在し、学術的な価値も高いことから、同市は2014年に認定への取り組みを本格化させ、官民一体の推進協議会の立ち上げや地質の特徴を観光客らに説明するジオガイドの養成、研究者との連携、拠点施設の整備、教育活動の充実などに取り組んできた。2017年、2018年と認定申請を行ったものの認定見送りとなり、今回の認定では3度目となる申請が認められた。

●鳥取砂丘周辺で自動運転バスの実証実験

鳥取市は、鳥取砂丘周辺で自動運転の路線バスを運行する実証実験を、2022年2月から3月にかけて10日間実施した。

実証実験では、ハンドルがない仏NAVYA社製の14人乗り電気自動車を使用され、高速バス事業を手掛けるWILLERなどが自動運転技術を提供し、日ノ丸自動車(鳥取市)と日本交通(同)が運行した。この車両は、人工衛星と通信して自車両の位置を認識し、センサーで障害物を感知しながら自走する。緊急時に手動で運転操作をするセーフティーオペレーターと補助役の保安員各1人が同乗した。

運行ルートは観光施設が集中する鳥取砂丘東側にある鳥取砂丘会館と、リゾートホテルの建設やグランピング施設の整備が予定されている西側のチュウブ鳥取砂丘こどもの国を結ぶ約2kmの区間を約20分で、1日4回往復走行した。

鳥取市内では運転手不足などによりバス路線が廃止・縮小されており、自動運転技術を導入することで持続可能な公共交通の確保につなげる狙いがある。

●山口県阿武町で民間の観光組織「阿武町観光ナビ協議会」が設立

2021年12月、山口県阿武町の農事組合法人理事や水産関係者など17人が民間の観光組織「阿武町観光ナビ協議会」を立ち上げた。オブザーバーである役場・商工会・農協・漁協・森林組合などから支援を受けながら民間主体の観光のまちづくりを進める。

同協議会は、2022年3月、同町にオープンしたキャンプ場「ABUキャンプフィールド」と連動した阿武町観光の魅力となり得る「体験プログラム」の開発も進めていく方針で、地域振興や観光振興を推進し、町の魅力を発信して町内への移住や定住の促進を目指す。

●香川県三豊市に車中泊専用の有料宿泊エリア「RVパーク」開設

香川県三豊市は2021年11月、電源設備を備えた車中泊専用の有料宿泊エリア「RVパーク」を市内の道の駅など3か所に開設した。キャンピングカーの人気の高まりに対応して、快適に安心して車中泊が楽しめる場所を提供するとともに、災害時の有効利用も視野に入れて整備を行った。電源設備や24時間使えるトイレがあり、近隣に入浴施設があるなどの日本RV協会の基準を満たし、同協会から認定を受けた。

RVパークを設けたのは、道の駅たからだの里さいた(5台分)、道の駅ふれあいパークみの(4台分)、父母ヶ浜(5台分)で、それぞれ駐車場の一角にスペースを確保した。

●香川県善通寺市、動く観光案内所の運用開始

香川県善通寺市は2022年2月、各地を回って市の魅力をPRする目的で、キッチンカー付きの移動式観光案内車の運用を始めた。キッチンカーでは、市の特産品「讃岐もち麦ダイシモチ」を使用した商品や料理を販売するほか、観光案内車では電動アシスト自転車のレンタルもできる。新型コロナウイルスの感染拡大の収束後は「動く観光案内所」として県内外へ出向き、新たな観光需要の取り込みを図る。

●宇和島城登り口に新たな観光拠点として市観光情報センターが移転

2021年8月、愛媛県宇和島市が2020年から移転新築を進めていた市観光情報センターが宇和島城登城口にオープンした。市は「伊達十萬石の城下町」として宇和島城を観光の軸と位置付け、道の駅「きさいや広場」内からセンターを移転した。センターは宇和島城北側登城口に立地し、隣接する市指定有形文化財「藩老桑折氏武家長屋門」などの雰囲気と調和するよう、城下町の景観を再現するような外観とした。センター内には観光案内所をはじめ、菓子やミカン加工品などを販売する土産物コーナー、休憩スペースなどを配置したほか、牛鬼の置物の絵付けなどの体験ブースも設けた。

●高知県の町・安田町・津野町などで宿泊施設が相次いでリニューアルオープン

2021年4月、アウトドア用品メーカーとコラボした宿泊施設として、高知県吾川郡いの町で「山荘しらす」が4年ぶりに再オープンし、高知県安芸郡安田町では「安田川アユおどる清流キャンプ場」がリニューアルオープンした。

しらすは旧土佐郡本川村などが1974年に開業し、鍋ヶ森などを訪れる登山客に親しまれていたが建物は老朽化が激しく、耐震性にも不安があったため、町は2017年から施設を休業し、リニューアルを行った。新装した施設は食堂やロビー、スタッフの居室などが入る3階建ての本館と、3～4人が宿泊できるロッジ6棟で構成され、延べ床面積は約1,070㎡。家具などは町が包括協定を結んでいるアウトドア用品大手「ロゴスコーポレーション」製を採用した。ロッジのテラスでは同社のバーベキュー用品も利用できる。

安田川アユおどる清流キャンプ場は1993年8月開業で、設備

の老朽化や利用客の減少を受け、安田町が再整備を計画し、国の交付金や県の補助金を活用してリニューアルを実行した。キャンプサイトを32区画に増やし、子どもがボルダリングを楽しめるツリーハウスを新築したほか、ユニットバスだったコテージ5棟はトイレとバスを分け、ロフトを設置するなどした。キャンプ用品大手のコールマンジャパンとの提携も実現し、管理棟にキャンプ用品を扱うショップを構え、イベントなども開催されている。

また、2021年7月には、高知県高岡郡津野町に宿泊施設「星ふるヴィレッジTENGU」と「遊山四万十せいらの里」がオープンした。

星ふるヴィレッジTENGUは1969年に国民宿舎としてオープンした四国カルストの宿泊施設「高原ふれあいの家 天狗荘」をリニューアルし、星空客室やプラネタリウムなどを新築した。天狗荘は標高1,355mにあり、視界を遮る山や人工的な光がなく、星空を求めて国内外から観光客が訪れていた。新装施設の延べ床面積は4,516㎡で一部4階建て。客室は30室で、宿泊定員95人となっている。

遊山四万十せいらの里は、1974年に高知県が開設した旧森林センターの建物を活用し、2005年から地元住民により運営されていた。ランチビュッフェが人気を博していたが、施設が老朽化したため町が建て替えを計画し、2019年9月から休業していた。移転先の木造平屋の新施設は、延べ床面積約345㎡で、ロビーや6室の宿泊部屋(定員計15人)、レストランを整備した。

(武智玖海人)